

# 旅とインテリア② ～ 東欧のアパートメント ～

塚口 眞佐子

今回はアパートメントという宿泊施設を紹介し、その魅力はコストパフォーマンス、と力説した。確かに100%そうなのだが、しかし最大の魅力は、その国の都市生活の一端に触れることだと思う。これはホテルでは味わえない。特に東欧では共産主義時代や、もっと以前の帝政時代の建築がそのまま残り、改装の程度に差はあれど、いずれにも現在の生活状況の中に、当時の片鱗が感じ取れる。引き続き、ここでいくつか紹介したい。

まずは、ほぼ昔のままらしき例。プラハの歴史地区、大通りに面した門を一步入ると古風な集合住宅が中庭を囲み数棟配置されている。その中の1室90㎡、広めの屋内通路に面した玄関から入室するとすぐにDK、奥にはアンティークたっぷりのLDが広がる。天井が高いのは歴史様式タイプのどこも共通。

次もオーストリア・ハンガリー帝国時代のセルビアのスポティツァ、アールヌーヴォーの宝庫の街でもある。旧市街地でのその集積は、聖地ブリュッセルをはるかにしのぐ。その中心部に建つ歴史様式の館、その1室50㎡の1LDK、インテリアは設備を含め現代感覚に改装されているが、躯体の魅力はそのままで。スケール感のため、あえて私の登場写真で失礼しました。

同じく二重帝国時代のブダペストの大規模集合住宅の1室、68㎡の2LDK。住戸内の躯体はそのままに設備だけの改装例。IKEA ONLYの家具も伝統様式が背景だと見映えが格段に良くなる(ダイニングテーブルにはIKEAのカatalogが置かれていた。誇らしいブランドという位置付けなのか)。

共産主義時代というクロアチアの首都ザグレブの集合住宅。階段そのものは軽快にしても、いかにも、な空間の武骨感否めぬ。旅人としてはそこにも旅情を感じることができる。住戸は88㎡の2LDK、各部屋がゆったり広く、キッチンや浴室等そのままに近い改装に好感が持てる。当時の生活が類推出来るのだ。ここは帰国便に合わせての1泊だけで恐縮だったが、このようなアパートメントには最低でも2泊はしたいものだ。オーナーにはもちろん都合だし、使わせて頂く側の心意気でもあると思う。何よりチェックインの手間を考えると1泊だけで転々とするのはしんどい。

私はもともと街並や邸宅を見て歩くのが趣味だ。外国ならばそこで実際に生活出来ると思うとワクワクする。そのワクワク気分のまま、予約の段階で宿の平面図まで仕上げてしまう。紹介写真からの推測だ。現地での整合性の打率もかなりのもの。アパートメントはそんな個人的趣味も満足させてくれる。



チェコ共和国 / プラハ



セルビア / スポティツァ



ハンガリー / ブダペスト



クロアチア / ザグレブ



大阪府インテリア設計士協会

〒541-0059 大阪市中央区博労町1-6-14  
TEL. 06-6262-1488 FAX. 06-6262-1553

URL <http://jp-interior.or.jp/ois>

E-mail [ois@jp-interior.or.jp](mailto:ois@jp-interior.or.jp)

facebook 「大阪府インテリア設計士協会」

4・7・10・1月 4回 / 年発行  
【4月発行分が遅れました】

発行人：河野 洋二

編集：OIS 第1事業部会

## 梅雨晴 No.114

### 新役員名簿

任期：令和3年4月1日～令和5年3月31日

役職	氏名
会長	河野 洋二
副会長	南野 江以子
〃	今井 俊夫
専務理事	岡崎 正明
常任理事	田原 妙子
〃	山口 一芽子
〃	吉矢 詳子
会計理事	来籐 澄江子
理事	広畑 直子
〃	瀬部 明
〃	山田 弘美彦
〃	西脇 利彦
監事	藤原 長彦
〃	小長谷 光
顧問	高橋 宏至
〃	植田 益夫
〃	足田 友一
〃	宮後 浩
〃	奥田 忠彦

賛助会員 代表者

アサカ硝子産業(株)	中島 富幸
大彌リビング(株)	能口 仁宏
二加屋(株)	杉本 旬平
YKK AP(株)	太田 哲也

# HASHIRIGAKI

葉知利書



城北公園の花菖蒲 写真協力 / 奥田 忠彦

## 秋から見学会を再開します

副会長 今井 俊夫

大阪はコロナ禍の緊急事態宣言下にあり、相変わらず重い空気が漂います。一方で、ワクチン接種がやっと進みだし、おそらく東京オリンピック(騒動)が終わる頃から日本経済も正常に向かうでしょう。

OISでは、1年半ストップしていた協会活動も軌道に戻す必要があります。今秋には延期していた「円成寺」見学会から再開したいと考えています。改めてご案内します。久しぶりに文化に触れ、爽やかな空気を吸いに出かけませんか。

OISには長い歴史があり、インテリア業界で活躍された諸先輩が大勢いらっしゃいます。今、足田顧問がこの葉知利書にOISの回顧録を執筆されています。それを読むと、OISのアソシエーションとしての意義と責務に気づきました。改めて諸先輩が築かれた財産の価値を知り、発展させていく必要があると感じられます。コロナ禍のあと新しい時代に入るとき、OISはさらに社会的役割を担って歩んでいく必要があると考えます。



円成寺、寝殿造りの遺構か？

## 令和3年度総会報告

大阪府インテリア設計士協会、令和3年度総会はコロナウィルス感染症拡大のため、昨年同様、会員各位に参加を求めず、事務局で少人数での開催となりました。

4月22日(木)18時からOIS事務局で、河野会長、今井副会長、岡崎専務理事が出席し議事を進めました。

今年度は任期満了による役員改選がありません。会長・副会長の再任が決まり、役員数は若干少なくなりました。

3人の会場出席者及び70通の委任状により定数(会員総数185人、賛助会員4社=会員の

## 河野会長の続投が決定



今井副会長 河野会長

1/3以上)を満たし、総会は成立し、審議は滞りなく行われたことを報告致します。



# OISの回想録(6) 和風講座

顧問 足田 友一

OIS回想録、今回は「和風講座」についてお話しします。

和風講座は、元常任理事の高木喬(故人)さんが中心となって開催された講座でした。高木さんは異色の先輩で、身長は180cmと大柄、いつも足首に重いウエイトを付けていました。そして、野球とビールが大好きで、大学野球や高校野球の観戦には必ず冷えたビールを持参してました。OISの催事では、ビールを大ジョッキで豪快に飲まれ、カラオケが大好きで「長崎は今日も雨だった」を歌う時は、いつも、そのバックコーラス『♪わわわ〜ん♪』で我々も参加し、楽しませていただきました。

高木さんの経歴は、三国丘高校から法政大学に進学、在学中は東京六大学野球リーグで3度の優勝に貢献されました。卒業後、プロ野球の近鉄バファローズにスカウトされ、その後、西鉄ライオンズ(今の西武ライオンズ)に移籍し、内野手として活躍、プロ野球選手として1000試合出場など、輝かしい記録を達成されたと聞きます。

プロ野球引退後は心機一転、大阪工業大学建築学科に進学され、1級建築士の資格を取得。その後、ミナミの飲食店などの設計で有名なお父様(高木茂雄氏)の跡を継ぎ、「焼肉はや」の店舗を多く設計されるなど和風の商業施設を中心に活躍されました。和風建築にはハイレベルの研究と知見を持たれ、会員に対して多くの和風建築講座を企画していただきました。

高木さん企画の「和風講座」のうち、特に印象に残っているものを紹介します。

① 2003年【對龍山荘】京都南禅寺門前の別荘の一つ。近代を代表する庭師七代小川治兵衛(通称:植治)による日本庭園が有名。「京奇屋名邸十撰」にも選ばれ、贅を凝らした数寄屋の建物は、東京の大工「島藤」島田藤吉により建築。(非公開)現在は株式会社トリの保養所・宿泊施設となっている。

② 2004年【加賀屋新田会所跡・加賀谷緑地】大阪市住之江区、住之江公園駅より徒歩15分、大和川の近くにある江戸時代の会所跡(詳しくは大阪市のHPを参照下さい)。この時の趣向は「和の心を味わいましょう。庭を眺めながらお茶会しましょう」という茶室見学とOISの初めてのお茶会でした。お茶会は高床式の舞台造りで、池に張り出した茶室「鳳鳴亭」で始まり、着物姿も艶やかな

南野常任理事(現副会長)と南野さんに着付けしてもらった新人女性会員がお茶とお菓子を運び、寛いだ雰囲気になることができました。その後、和風講座が始まり、修復工事をした株式会社金剛組担当者から話を聞き、高木さんが書院や鳳鳴亭、三疊台目の茶室などについて詳細な説明をされました。参加者はみな満足し、充実した時間を過ごしました。大阪市の所有で入園は無料なのでぜひ見学に訪れて下さい。

③ 2005年4月【養翠園】和歌山市にある紀州徳川家の徳川治實により造営された大名庭園。平成元年に国の名勝として指定。庭内には、海水を取り入れた「汐入の池」や、数寄屋建ての御茶屋

「養翠亭」、茶室「実際庵」「左斜め登り御廊下」また、移築された徳川家の「湊御殿」などがあり、高木さんから説明を受けた。

④ 2005年9月【鴻池新田会所跡】東大阪市、JR学研都市線「鴻池新田」から徒歩5分の所にある会所跡。重要文化財である会所の居宅を借り切って、ここでも保存改修工事を担当した株式会社金剛組担当者から工事の話聞き、高木さんから大和川水系と会所の歴史について話を聞き、それぞれの建物の見学が行われた。

⑤ 2005年11月【久保惣記念美術館】和泉市、和泉中央駅よりバスで約10分。最初に高木さんから全体の説明があり、その後、美術館で特別展や重要文化財などを鑑賞した後、本館庭園内の惣庵(非公開)と聴泉亭(昭和15年、二代目久保惣太郎氏が表千家不審庵、残月亭を模して建てた茶室)を特別に見学し、和泉市の担当者から説明を受けた。

高木さんからは表千家、残月亭や不審庵の図面、写真の資料による説明があり、千利休の流れが良く理解できた。

高木さんは幾つもの講座を通じ和風建築について多くの専門的な知識と体験を我々会員に与えて下さいました。残念ながら高木さんは2012年11月25日、72歳でにお亡くなりになりました。

今年もコロナ禍で各種講座や見学会が実施できない状況が続きますが、高木さんの遺志を継いで、今井副会長が和風建築や近代建築・インテリアの見学会を提案し実施されています。コロナ感染症が終息後の企画を大いに期待したいと思います。



## 日本の古民家

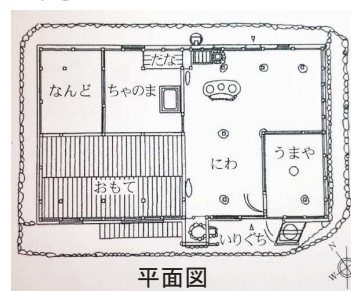
山口 一芽

「古井家住宅」=千年家(国指定重要文化財) 場所:兵庫県姫路市安富町



私は旅が好きで、折に触れ「古民家」を見つけ足運び。そこには自然や環境と共存した先人の建築技術・工夫・知恵が溢れて実に楽しい。その一端をご紹介したいと思う。たび重なる周囲の

火災から難を逃れ「無災の千年家」と称される古民家。桁行14m、梁間3.8mの入母屋造で構造技法などからみて、400余年は経た室町時代のもので推定される。民家としては最も古い遺構の一つである。



屋根は茅葺で家全体に大きく被さり、棟に七連の千木(ちぎ)が組まれている。(写真①) 壁は大壁造りで、下地には粗朶(そだ)が用いられている。正面以外は開口部が小さく、軒先も低い。(写真②) 平面の半分を占める下手が土間「にわ」で、そこに「おくど

## 家具よもやま話

No. 10

小長谷 光

写真は、モダンデザイン華やかな頃、ドイツのシュトゥットガルトで出版された「Good Furniture Beautiful Rooms」という書籍からです。北欧を中心にヨーロッパのものが多く収録されて、これはニューヨークのデザイン事務所による作例です。

写真①は、ビルトインタイプのキャビネット、オープン棚を扉付棚で構成されており、Aはライティングリッド、Bはソーイングマシンリッドとなっています。リッドとは開閉できる蓋のことなので、Aの引手の位置や写真②を見ると、引き倒し式の扉で、Aの開いた状態はわかりませんが、ライティングビューローのようにになっているのではないのでしょうか。Bの表面に見えている縦長の台形状のものは、リッドを開けるとおそらく自重で下に出てくる脚部でストッパーの有無は不明ですが、リッドの片側が蝶番で固定されていることを考えると、ミシンの重さで下がることはないでしょう。Aともにもリッドの内側はリノリウム貼りだそうです。

残念ながらモノクロ写真なので微妙な色調はわかりませんが、Aの扉は白、Bはグレー、Cのみがアッシュ材のロールドアでナチュラル仕上、本体の箱体はライトグレー、赤もあるとのこと、これはいくらか濃く見えるBの扉で、Eは本体と同じライトグレー、DはBと同じグレーで、Dの楕円形のものはミラーではないかと思いますが、定かではありません。

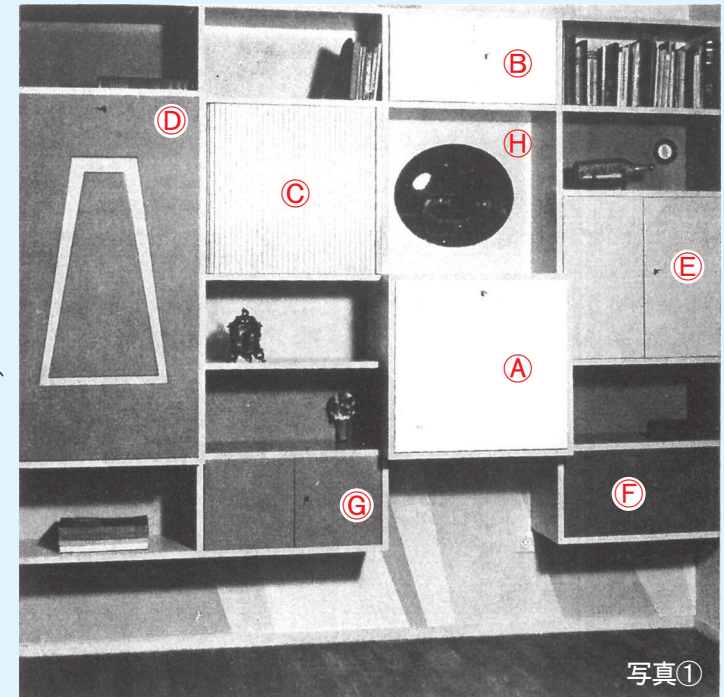
写真②では女性がミシンを使用中です。人物が入ることでサイズ感が得られ、これであれば背後のライティングリッドを開けた状態で必要な資料を広げておくことも可能ではないかと思えます。

図は、B部を含むキャビネットの断面で、脚部が格納されたリッドの状態(リッド表面と脚部が同じ面に収まっているところに注目)や、内部に2重になった糸巻きの収納部も表現されています。

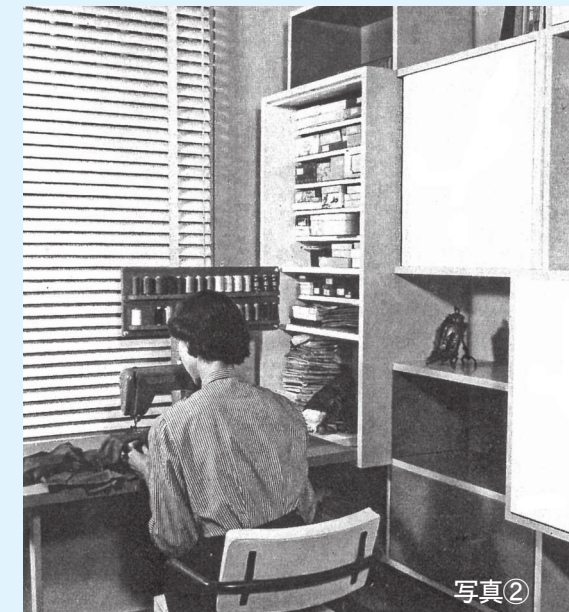
書籍の図の縮尺が正確であればソーイングリッド使用時の高さは800mm、キャビネットの総高も2,320mmとなり、かなり高いものとなっています。

この写真で女性は電動ミシンを使用しています。このように家電製品に対応した家具は様々なデザインがされてきましたし、日本でもヴォーリズ氏設計の住宅に壁面取付で同じように引き倒して使用するアイロン台や作業台も残っています。

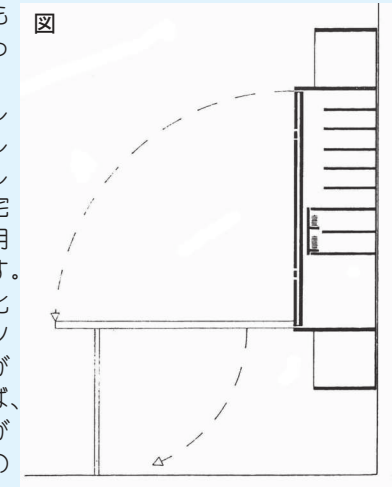
しかし、家電製品の目まぐるしい変化と家具の関係を考える時、どこまでシクロされているのか、逆に、その必要があるのかと考えてしまいます。例えば、極端かもしれませんが、すでにテレビがロールスクリーンのように巻き取り式の



写真①



写真②



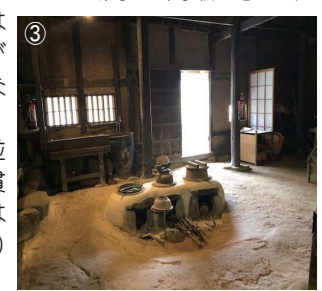
図

さんがあり「うまや」がある。馬との共生。(平面図・写真③) 桁行(6、6尺)、梁間(6、9尺)と、1間が普通(6尺)より広く割付られて、ゆったりと感じる。(1尺約0.3m)



②

居室部は縦割りの「広間型3間取り」。柱は栗材で太さは一定ではないが特に太い柱もない。上屋柱は1間ごとに建ち並び、柱を繋ぐ貫は太く、部材は全て「はまぐり刃のちようん」



③

で表面加工されている。古い時代の特徴である。(写真④) 「すのこ竹の床面」があり、天井にもすのこ竹が用いられている。昔は板を作ることが容易ではなく、それに代わるものとして竹を編み使っていた。(写真④・⑤)

「古井家」は長百姓(おさひやくしよう)の階層に属した家柄であったと推考される。農家の面影を現代に伝える稀にみる中世民家遺構である。



④



⑤